いしかり博物誌 136

石狩川の主はどこにいた？

「石狩川の主は巨大なチョウザメと亀だ」といわれています。この形の伝説となったのは江戸時代1800年代のことと思われます。というのも、この時代に石狩市本町地区の弁天社と石狩川の主をかたどった神像（鮫さん）がつくられているからです。その後、明治時代に入ってから同じく本町地区にある金龍寺の鮫さんがつくられました。鮫さんのご利益はサケの豊漁と海や川で漁をする人々の安全を守ることで、今も漁業者を中心に信仰されています。石狩ではチョウザメは川の主であると同時に神様であるため、漁師は昭和10年ごろまでチョウザメを食べなかったといわれています。

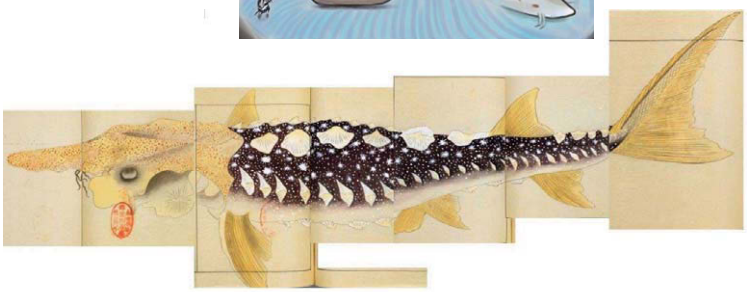
この伝説の元をたどると、旭川市のアイヌ民族の伝承に神居古潭の神「シャメカムイ（チョウザメの神）」の話がありますが、彼らがここを丸木舟で通る時、舟べりを「トントン」とたたいてシャメカムイに合図したそうです。そうしないと舟が動かなくなったり、ひっくり返されたりするといわれていたそうです。

この習慣はかなり古くからのもので、実際に舟をたたいて合図したことが記録されています。明治8（1875）年、開拓使大判官であった松本十郎が石狩や江別のアイヌを雇って石狩川をさかのぼって神居古潭のパラモイを通過した際、アイヌたちは皆、丸木舟の縁を一斉にたたきはじめたそうです。十郎が不思議に思ってなぜたたくのかと聞いたところ、「このふちには巨大な潜龍沙魚（チョウザメ）あるいは大亀がいるからだ」と答えたそうです。この記録は『石狩十勝両河紀行』に書かれていて、チョウザメと大亀の主が神居古潭のパラモイ付近にいたと信じられていたことが確認できます。

この記録から、石狩市などに残る石狩川の主伝説の原形は上流部にあり、それが人々の動きにともなって石狩川流域そして河口部へ伝わったと見ることができます。（石橋孝夫）

平成16年石狩川河口で捕獲のチョウザメ（体長2.3m）

伝説では主が河口をふさぐ



江戸時代に描かれたチョウザメの図（文化3年丹州魚譜 国立国会図書館蔵を改変）

石狩川の主の居場所（神居古潭パラモイ）

石橋孝夫　Takao Ishibashi

専門分野は考古学と石狩史。石狩紅葉山49号遺跡の発掘を手がけたほか、縄文時代から江戸時代に至るサケ漁の方法や文化について研究する。

ERIS「いしかり博物誌」は、えりすいしかりネットテレビ（http://www.i-eris.tv/）でもご覧いただけます。